Neo-Pragmatics : Beyond Neo-Grician Pragmatics

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5234

Neo-Pragmatics : Beyond Neo-Grician Pragmatics

—語用論の問題・認知意味論による解法—

中 村 芳 久

0. 序

自然言語の意味論として，基本的には真理条件意味論（truth-conditional semantics)だけが存在し，直感される多様な意味相の理論的対処法が模索されていた頃，語用論の登場（Grice 1967, 1975）とそれ以後の新グライス派の展開（Horn 1972, 1984, 1989, Levinson 1987）は，真理条件的意味以外の意味分析に理論的基盤を与え，エレガントな意味体系を成立させた。ところが，このところの認知意味論（cf. Langacker 1987, 1991, Lakoff 1987）の隆盛は，真理条件意味論と語用論から成るとされてきた自然言語の意味体系の理論的基盤を大きく変えつつある。

そのような流れのなかにあって，本稿は，まず新グライス派語用論を概観し，理論上の問題点を指摘する。次にこの問題が認知意味論的観点から解消可能であることを示す。この議論を通して，さらに，認知意味論が真理条件的意味と語用論的意味のすべてを説明するというのではなく，認知意味論と語用論からなる二元的な意味理論によって自然言語の全域的な意味分析が可能であることが明確にされる。

このような全域的な意味理論は（広義の）語用論の枠組みで捉えることができるが，従来の語用論の体系は，グライス語用論であれ新グライス派であれ，真理条件意味論を前提として組み入れていたのに対し，ここで明らかにされる枠組みは認知意味論を組み入れることになるので，その名称としてNeo-Pragmaticsを用いることにする。

1. 0. 語用論の意味体系

新グライス派のHorn (1984, 1989) に基づきながらも若干の修正と簡略化

を行いながら語用論の構成と理論的基盤について概観する。その焦点は，意味の類型化の理論的根拠（1.0）と特性上の根拠（1.3）にある。本稿の性格上，会話の含意についても少し詳しく見ることにする（1.1，1.2）。

語用論は何よりも，話し手が特定のコンテクスト内で発話（utterance）によって意図的に伝達する意味に関する理論である。その意味の種々相は二つの理論的基準，すなわち，（ｉ）真理値に関与するか否か，（ii）会話の原則に関連するか否か，によって四つのレベルに階層化される。類型化の前に，会話の含意を識別し抽出する基準（ii）の会話の原則について触れておかなければならない。

会話の原則は，最小労力の原理（cf. Zipf 1949）が話し手に志向するか，聞き手に志向するかによって，次の二種類になる（cf. Horn 1984）。

(1) Q Principle（Q原則）：伝達すべき情報のうち，与えうる最大の情報を与えよ。

R Principle（R原則）：伝達すべき情報のうち，聞き手にとって推論可能だと判断される情報は削除し，最小の情報を与えよ[1)]。

まず，R Principle（R原則）の方から検討しよう。この原則は最小労力の原則が話し手に作用する場合の原則である。話し手が，自らの発話に要する労力を少なくしようとすれば，聞き手にとって推論可能だと判断される情報は省略し，発話量の少ない短めの表現を用いるだろう。次の例において，話し手Bの発話はR原則にしたがった発話である。

(2) Speaker A : Can you tell me the time?

Speaker B : Well, the milkman has come.

話し手Bは伝達すべき情報，すなわち 'It may be around 5 o'clock, since the milkman who usually comes around 5 o' clock has come.' という情報のうち，聞き手に推論可能と判断される情報を省略し，ただ "The milkman has come." とだけ言っている。これが話し手がR原則にしたがう場合の典型的な発話である。このとき聞き手（Speaker A）は，その発話から話し手Bの真意を推論しなければならないが，その推論の結果得られる含意を，「R原

則に基づく含意」(R-based implicature) という (以後 RI)。当然のことながら RI は発話内容より情報量は多く，伝達が正しく成立していれば RI は相手の真意に等しくなる。上の例でも伝達が成立したとすると，その RI は(3)のように Speaker B の真意と等しくなる。

(3) RI : It may be around 5 o'clock, since the milkman who usually comes around 5 o' clock has come.

RI は後で見るように，会話の含意の一種であり，語用論の一つの意味タイプである。

次に Q Principle (Q原則) について見てみよう。話し手が，聞き手の推論に要する労力を最小にしようとすると，伝達すべき情報を削除せずにすべて与えることになる。例えば，話し手が「スミス氏が話し手の知らない女性と今晩会う」ことを，Q原則に基づいて伝達するのであれば，特定できない女性を a woman で表わす (4a) のような表現になるだろう。

(4) a. Mr. Smith is meeting <u>a woman</u> this evening.

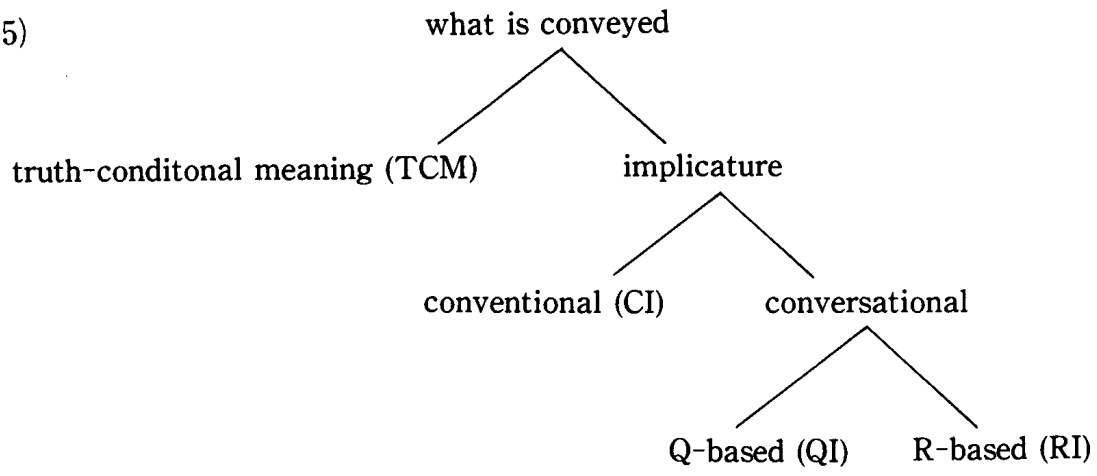
b. QI : <u>The speaker of (4a) doesn't know who she is,</u> ie., the woman is <u>not his mother, his wife, or his daughter.</u>

話し手がQ原則に則って発話しているのであれば，聞き手にはその発話内容が話し手の与えうる最大の情報であることがわかり，その女性について話し手がそれ以上知らないことが推論される。例えば，その女性が，スミス氏の近しい人ではない，例えば，母親，妻，娘，友人などではないということなどが推論されるのである。これが，「Q原則に基づく含意」(Q-based implicature) である。この種の含意を以後 QI と呼ぶことにし，(4a) の QI を (4b) に挙げておく。QI も意味タイプの一つである。

さて，発話の伝達する意味 (what is conveyed) は，理論的基準 (i) 真理値に関与するか否か，(ii) 会話の原則に基づくか否か，によって，階層を成す四つのタイプに類型化される。それを簡略化して(5)に表示する。

発話の意味は，まず基準 (i) 真理値に関与するか否かによって，真理値に関与する意味とそうでない意味，すなわち真理条件的意味 (truth-conditional meaning, 以後 TCM) と含意 (implicature) に分けられる。次に，

(5)



含意は，基準（ii）の会話の原則に基づいているか否かによってさらに二つのタイプに分けられる。会話の原則に基づいて生じる含意を会話の含意（conversational implicature）とよび，基づいていないものを慣習的含意（conventional implicature，以後 CI）とよぶ。慣習的含意 CI は，含意とはいっても語句や表現に固有の含意で，コンテクストや会話の原則から独立している。当初 but や therefore の含意が典型的な CI とみなされたが（Grice 1975），前提的意味（presuppositions）のほとんどがこの語用論の枠組みの CI であるとみなされている（Karttunen and Peters 1979）。日本語のいわゆる敬語の意味も CI であり，機能的構文論（Kuno 1985）の取り込む視点的情報も CI である。なかでも特筆すべきは，文タイプ（例えば，平叙文，疑問文，命令文）の表す典型的な illocutionary force（断定，質問，提案）も CI だということである。CI は，TCM でない点で語用論的であり，会話の原則に依存しない点で意味論的であるという具合に，消極的な位置付けがされる。しかし，そのような二面性故に，CI こそが意味論と語用論の接点（interface）だとされることもある（Horn 1988）。二つの含意のうち，会話の含意は，すでにみたように，Q 原則に基づくか R 原則に基づくかによって QI と RI の二種類に分けられる[2)]。

以上のように，自然言語の意味あるいは発話の意味は，二つの理論的基準によって明確に識別される四つのタイプの意味（TCM，CI，QI，RI）から成るエレガントな大系を成しているというわけである。真理条件という伝統的

概念に，発話という視点から会話の原則を導入することにより，それまでの真理意味論や前提意味論をも統合し，自然言語の全域的意味に対して理論的基盤が与えられたことになる。QI と RI についてはまだいくつか重要な点があるのでもう少しみていくことにする。

1．1．含意 QI

話し手がQ原則を守り，ある量の内容 (p) を発話したとすると，聞き手の方は，発話された内容量以上のことは何も意図されていないと推論する。これが含意 QI であり，一般に 'no more than p' で表わされる。QI の一部，つまりその下位集合は次のようにより厳密に規定することができる。

(6) 同程度のサイズ（長さ）の表現 e_1, e_2 があり，e_2 が e_1 より情報量が多いとき，e_2 と e_1 は Horn Scale $\langle e_2, e_1 \rangle$ を形成し，一般に，e_1 を含む発話 "...e_1..." は，'...not e_2...' を含意する。

数量詞 four と three を例にとってみよう。これら二つの語は同程度の長さであり，four が three より情報量が多いと言えるので，〈four, three〉という Horn Scale を形成する。従って，three を含む発話 "John has <u>three</u> children." は，'John <u>doesn't</u> have <u>four</u> children.' を含意する。Horn Scale には，他にも〈all, some〉，〈and, or〉，〈hot, warm〉，〈know, believe〉などがあり，例えば，発話 "I <u>believe</u> p." は，'I <u>don't know</u> p.' を含意する。また，発話 "Mr. Smith is meeting <u>a woman</u> this evening." が 'Mr. Smith is <u>not</u> meeting <u>his wife</u>.' 等を含意するのはすでに見たとおりであるが，この場合 Horn Scale 〈one's wife, a woman〉が存在している。

ところで，three の意味値は「3 より大きくも小さくもない」であるが，上限の「3 より大きくない」(no more than three) は QI によって表され，下限の「3 より小さくはない」(at least three) は TCM によって表される。従って，(7a) の TCM と QI は (7b) のようになる。

(7) a. John has <u>three</u> children.

b. TCM : John has <u>at least three</u> children.

QI : John has <u>no more than three</u> children.

threeの上限「3より大きくない」(QI) は，"John has three children, in fact four." という具合に修正できるが，下限の「3より小さくない」(TCM) の方は "*John has three children, in fact two." のように修正できない。これは上限を表すQIと下限を表すTCMの質や「格」が違うためである。つまり，含意は修正や訂正が容易にできても，TCMとして述べられたことは容易にそれができないのである。また，子供が二人しかいないJohnについて，(7a) の記述を用いると「うそ」あるいは「間違い」の直感が生じるが，子供四人いる場合だと必ずしもそのような直感は生じない。これも同じ理由によるものと思われる。前者はいわば真理条件違反であるのに対し，後者は会話の原則（Q原則）に違反している程度であり，真理条件違反の方が「罪」が大きいのであろう。

1．2．含意RI

話し手がR原則にしたがう場合，推論可能と判断される情報は削除し，必要な部分だけ伝達する。聞き手の方は，与えられた情報を適度に増幅して話し手の意図する伝達内容を理解しなければならない。このメカニズムで推論されるのがRIである。RIの典型的現象を(3)で見たが，他に，Grice (1975) の例(8)や，心理言語学者や意味解釈システムに関心のある研究者らの指摘する(8)〜(12)を含めるのが通例になっている (Atlas and Levinson 1981, Horn 1984, cf. Appendix 1)。それぞれのRIを表現の下に挙げているが，RIは表現の内容より，特定的で情報量が多い。

(8) Conjunction buttressing（等位接続詞andを時間順序，原因結果として強化解釈 Grice 1975, Schimerling 1975, Atlas and Levinson 1981)

Mary turned the key <u>and</u> the door opened.

RI : Mary turned the key <u>and then</u> the door opened.

RI : Mary turned the key <u>and therefore</u> the door opened.

RI : Mary turned the key <u>in order to</u> make the door open.

(9) Membership categorization（指示の特定化 Sacks 1972)

The baby cried. The mother picked it up.

RI : The mother of the crying baby picked it up.

(10) Mirror maxim (鏡像的推論 Harnish 1976, cf. iconicity, Haiman 1985)

John and Mary bought a house.

RI : John and Mary bought a house together, not one each.

(11) Frame-based inference (フレームに基づく拡充推論 Chaniak 1972)

John pushed the cart to the checkout.

RI : John pushed the cart full of groceries to the supermarket checkout in order to pay for them, and so on.

(12) Bridging inference (橋渡し推論 Clark and Haviland 1977)

Bill has a new car. The window doesn't close.

RI : Bill's new car has a window.

"I read the book". の持つ「〈全部〉読んだ」という含意 (cf. "I read today's paper.") や, secretary と言えば〈女性〉というような, いわゆる連想なども RI である (Harnish 1976, Horn 1984)。

文法現象のなかでも特に形式的究明の進んでいる照応現象について, 会話の原則による分析が興味深い成果を挙げている (Horn 1984, Levinson 1987b, 1991, Huang 1991, 1992, cf. Chomsky 1982 : 227)。この場合も, 語彙名詞句の繰り返しを避けて代用形を用いるのは, 話し手が労力節約のためにR原則にしたがうためであり, 従って, 代用形から推論される指示内容は RI である。

これまで考察した RI は, 話し手が労力節約のために用いる表現の含意であった。伝達される情報の一部が省略されるために, 聞き手は情報を補って解釈する必要がある。その結果得られるのが含意 RI である。間接発話行為に代表されるような例もこれまでの例と同列に扱われることが多いが (Horn 1984, 1989), この場合話し手の動機は, 最小労力の原理ではなく, 丁寧さの原理である。間接的要請表現(13)を見てみよう。

(13) Do you know the time?

IR : If you know the time, tell me what it is.

「時間をおしえる」ためには「時間を知っていること」が前提である。話し手はその前提内容を質問の形で発話し，「時間をおしえて」という要請を含意として伝達している。従って，含意（要請）の方が表現内容（前提）より情報量が多く，この含意もRIである。しかし，話し手がこの表現を用いる動機は，労力節約のためというよりは，丁寧さ（相手への配慮）である。直接表現によって相手に与える圧迫感や不快感を，伝達情報を適度に減じることによって回避していると言える。英語のいわゆる丁寧表現には，否定辞繰り上げ（Horn 1978），過去形や進行形の使用（eg. Could you～? vs. Can you～?, I'm thinking～. vs. I think～），代名詞の特種用法（One/We should do X. vs. You should do x.），反対語の否定（He is not young. vs. He is old.）などさまざまな方略があるが，基本的には，丁寧さに動機づけられてR原則に従う表現であり，伝達すべき情報の削除（実際には抽象化やスキーマ化）である。つまり，話し手の真意（p）の一部が丁寧表現の内容（q）であり，pはqを伴立（entail）する（p ⊃ q，Nakamura 1983, 1991）。R原則を順守する話し手の動機に関するHorn (1984) の指摘は不十分であり，最小労力の原理に，丁寧さ原理(Leech 1983)などを加える必要がある。(他にもレトリック効果を狙う場合が考えられる。)

(14) R原則順守の動機

a．最小労力の原理

b．丁寧さの原理

1．3．TCM, CI, QI, RIの特徴

表現の伝達する4種類の意味内容は，（i）真理値へ貢献するか否か，（ii）会話の原則と関連するが否か，という二つの基準によって理論的に明確に類型化されたわけであるが，この類型化はそれぞれの実際の振る舞いからも支持される。つまり，四つの意味タイプは（i）取り消し可能か否か（cancellability, Grice 1975），（ii）メタ言語的否定（metalinguistic negation）が可能か否か（Horn 1985, 1989），によってきちんとした振る舞い上の異なり

をみせるのである。これを表にすると以下のようになる。

(15)

	TCM	CI	QI	RI
取り消し可能性	−	−	+	+
メタ言語的否定	−	+	+	−

取り消し可能性に関して，TCM と CI は取り消せない（−）が，会話の含意（QI と RI）はそれが可能（+）である。(16a) の TCM の一部は (16b) であり，(17b) は (17a) の CI であるが，(16c) (17c) はそれぞれ TCM，CI が取り消し不可能であることを示している。

(16) a. Their son is a bachelor.

b. TCM : Their son is unmarried.

c. *Their son is a bachelor, but he is married.

(17) a. Their son is a bachelor.

b. CI : They have a son.

c. *Their son is a bachelor, but they have no son.

会話の含意の取り消し可能性は以下の例によって示される。(18b) は (18a) の QI であるが，それが (18c) に見られるように取り消されている。同様に，(19a) の RI である (19b) が (19c) では取り消されている。

(18) a. John has three cows.

b. QI : John has no more than three cows.

c. John has three cows all right, in fact he has ten.

（[乳牛の育成助成金支払いのための枠に関する話題で]「ジョンのところにはちゃんと三頭いますよ，実のところ十頭いるんだから」）

(19) a. John went home and drank beers.

b. RI : John went home and then drank beers.

c. John went home and drank beers, but not in that order.

メタ言語的否定は，通常の否定が意味（TCM）否定であるのに対し，表現の形態上の不備を指摘する否定である。例えば，相手の発話のどこかに発音

上，形態論上，ないしは統語論上不備がある場合，これを指摘するのがメタ言語的否定である。⑳の local inhabitant の否定はメタ言語的で，相手の地名の発音上の誤りを指摘している。㉑Bのメタ言語的否定は話し手Aの mongoose の複数形 mongeese が正しくないことを指摘している。いずれも意味内容を否定しているのではない。

⑳ A stranger in Wales : Is this a road to Llanfairfechan [lǽnfɛəfé tʃən]?

A local inhabitant : Well, this is not a road to [lǽnfɛəfé tʃən] —this is a road to [lǽnfɛəfékən].

㉑ Speaker A : So you caught three mongeese.

Speaker B : Well, I didn't catch three monGEESE—I caught three monGOOSES.

この種の否定が意味の中核とされる TCM を否定しないことは自明のことであるが，⑮の表にあるように CI と QI は否定する。次の㉒Bの否定は，manage to do x の CI 'it is difficult for～to do x' を否定している。

㉒ Speaker A : So you managed to catch some mongooses.

Speaker B : I didn't MANAGE to catch some mongooses—it was easy.

Bは，否定文を用いてはいるが，TCM の「何匹かのマングースを捕らえた」ことは否定してはいない。このことは some-any の交替が起きていないことからも明らかだろう。(23a) の TCM と QI は (23b) に示されているが (cf (7))，㉔の Speaker B の否定は，数量詞 three の含意する QI「3人より多くはない」(no more than three) を否定するメタ言語的否定である。そのため後続する she has four とも矛盾しない。

㉓ a. John has three children.

b. TCM : John has at least three children.

QI : John has no more than three children.

㉔ Speaker A : So she has three children.

Speaker B : Well, she doesn't have three children—she has four.

もし(24)Bの否定が通常の否定であれば，TCM を否定し，その意味は「子供は三人よりすくない」になり，後続する she has four と矛盾するはずである。

いま「メタ言語的否定は CI や QI を否定する」という言い方をしているが（Horn 1985），メタ言語的否定は，本来形態上の不備を指摘するものであるから，意味を適切に伝えるために守るべき形態上の規則や原則が守られていないことを指摘する否定であると言ったほうがより正確である。そうすると，(22)(24)のメタ言語的否定は，それぞれ相手の表現が前提条件（CI は従来の前提的意味に等しい！）や会話の原則（Q 原則）を守っていないことを指摘しているということになる。

また，このようにメタ言語的否定をとらえると，RI が否定されないわけも見えてくる。まず言語事実からみてみよう。(25a) の RI は (25b) であるが，この含意はメタ言語的に否定することはできない (25c)。

(25) a. He broke <u>a finger.</u>

b. TCM : He broke <u>a person's finger.</u>

RI : He broke <u>one of his fingers.</u>

c. *He didn't broke a finger (=he broke a finger, but it wasn't his.)

つまり，(25c) は RI だけを否定することなく，「彼は指を骨折したが，それは自分の指ではなかった」というような解釈にはならない。丁寧さに動機づけられた表現の RI も同様である。

(26) a. You can pick me up at the station. (駅でぼくをひろえるね)

b. TCM : It's possible for you to pick me up at the station.

RI : Pick me up at the station.

c. *You cannot pick me up at the station (=you can pick me up at the station, but don't do that).

(26b) のような TCM と RI をもつ (26a) の否定文 (26c) は，TCM を否定せずに RI だけを否定することはない。従って，(26c) は「君はぼくを駅でひろえるが，その必要はない」という解釈にはならない。

すでにみたようにメタ言語的否定は，本来表現の形態上の不備を指摘する

ものであり，CI や QI を否定すると言うのは，実は前提条件(語句や表現の使用条件）やQ原則が守られていないことを指摘しているのであった。その否定が，RI を否定できないとはどういうことであろうか。それについては以下のように考えることができる。RI は話し手が R 原則を守っているときに生じる含意である。話し手がR原則を守り必要なだけの情報しか与えないことは，優先すべきQ原則に違反している。通常この違反は許されないが，正当な理由（最小労力や丁寧さ）がある場合は許される（cf. Appendix 2)。要するに，単純なQ原則違反はメタ言語的否定によって摘発されるが，容認されたQ原則違反（R原則順守の場合）は，摘発されないというわけである。これが RI が否定されないということの内的メカニズムである。子供が四人いるのに，三人いるという発話は，単純なQ原則違反であるから，メタ言語的否定によって指摘できるが（eg. he doesn't have three—he has four.)，ある人がその人自身の指を骨折したことを単に "I broke a finger." と言うのはQ原則違反ではあるが，この発話は最小労力の原則に動機づけられたものであり，容認される違反であるために，メタ言語的否定による指摘は成立しない。

別の言い方をすると，子供が四人いるのに「三人いる」という発話は正確な子供の数を伝えないが，自分の指を骨折したときに，誰の指かを特定せずに "I broke a finger." と言ったとしても，骨折したのが話し手の指だということが通じているのである。つまり，単純なQ原則違反は，伝達情報が正確さを欠くことになるが，R原則順守はQ原則違反であっても，話し手の真意はちゃんと伝わっている。従って，前者の場合は，何らかの修正（特にメタ言語的否定によって指摘した上での修正）が必要であるが，後者の場合は情報伝達上なにも問題はなく修正する必要もないということである。

語用論に関しては他にも論ずべき重要な問題が残されているが，これまでの議論と以後の展開(と理解)に係わるものについて，Appendix で若干論じることにする。特に，（ i ）QI と RI の混同，（ ii ）Q原則とR原則の優先順序，（iii）意味の類型化に関する Horn, Grice, Levinson の比較，について Appendix 1 ～ 3 で議論する。

2．0．語用論の問題

第1節において(5)のような意味類型の理論的根拠と特性上の根拠が示され，二つの根拠が密接に関連していることも示唆されたであろう。しかしながら，そのような意味体系を内包する語用論に二つの問題が内在する。その一つは，含意RIに二種類（RI_1, RI_2）があり，RI_1の方は，語用論に特有の意識化可能な推論によって得られるものではない，ということである。第二の問題は，理論上真理値に関与するはずのないRI_1とQIが真理値に貢献するという問題である。この指摘が正しければ，「真理値に関与するか否か」という第一基準は放棄せざるをえないし，語用論的含意も，真理値に関与することがあるだけでなく，推論の質も均質ではなくなるので，語用論の統一的存在基盤がなくなることになる。つまり，究極的には意味論と語用論の区別が存在しないということである。しかし，語用論の問題を検討していくうちに，両者の新しい関係が見えてくる。

2．1．R原則の問題：二種類のRI

R原則に基づく含意を注意深く調べると二種類あることが気付かれる。しかも，二種類の含意の異質性はR原則でとらえることはできない。発話"I broke a finger."を再度取りあげてみよう。この発話がRIとして'I broke one of my fingers.'を含意することはすでに見たとおりであるが，この発話は（27a）のようなやり取りのなかでは別のRIを含意する。これら二種類の含意，すなわち最初に指摘した含意をRI_1として，このやり取りで生じる含意をRI_2として，（27b）に挙げる。

(27) a．Speaker A : Let's play catch.
　　Speaker B : Well, I broke a finger yesterday.
　　b．RI_1 : I broke one of my fingers.
　　RI_2 : I can't play catch, because I broke one of my fingers.
　　c．Inference steps of Speaker A : TCM → RI_1 → RI_2

このやり取りにおいて，聞き手（Speaker A）は話し手Bの発話からまずRI_1を理解し，それに基づいてRI_2を推論するものと思われる。（この二段式

の推論過程を(27c)のように示しておく。)この通りであれば，RI_1とRI_2はレベルの異なる含意だということになる。

このレベルの差異は，推論の質の違いに起因する。"I broke a finger." の a finger に「主語の所有する指」という解釈が成立するのに，なぜ "I slept in a car." の a car にその解釈ができないのかすぐに説明することはできない。「言語はそのようになっている」としか言いようがないところがある。これは，この種の解釈の仕組みが意識化できないからであろうと思われる。これに対して，「指を骨折している」から「キャッチボールができない」(RI_2) への推論の説明は誰にでもできそうである。これは，この推論が常識に基づく推論であり，意識化可能だからである。以上のような意味で，RI_1の推論(解釈) は内在的 (internal) であり，RI_2の推論は外在的 (external) であると言うことができる。

1．2に挙げた(8)〜(12)のRIはすべて内在的推論に基づくRI_1であるが，(8)(10)のandに係わる含意の説明に導入される「類像性の原理」(iconicity principle, Haiman 1985) は，内在的推論を構成する一つの原理である。

また，メタファーやメトニミーに関して認知論的究明が進められているが，これも内在的推論のメカニズム究明に他ならない。例えば，「学内水泳大会の出場者を探している」に対して「太郎はトビウオだ」というメタファーによる応答があったとしよう。この応答はまず「太郎は水泳が上手だ」と解釈され (RI_1)，そしてそれを基に「太郎を誘ったらどうか」という解釈がなされる (RI_2)。かつてメタファー解明の期待が語用論に寄せられたことがあったが (Grice 1975)，この例からも分かるように，メタファー解釈は内在的推論に基づくRI_1であり，語用論的，外在的推論に基づくものではない。

メトニミーについても同様である。「プラトン」をプラトンの著作と解するメトニミー解釈 (cf. 28)，「朝日新聞」から新聞売り場の新聞や新聞社と解釈する作業 (cf. 29)，あるいは「彼女はたばこをくわえている」という表現でくわえているのはたばこの火のついていない端であるという解釈 (cf. 30) などには，共通点がある。基本的にはいずれも読みの特定化である。つまり，RI_1は表現内容を具体化し，特定化したものである。

(28) Plato is on the top shelf. (Nunberg 1978, Fauconnier 1985)
RI : The book by Plato is on the top shelf.

(29) Jones has bought the Times. (Sperber and Wilson 1986)
RI : Jones has bought a copy of the Times.
RI : Johes has bought the press enterprise which publishes the Times.

(30) Susan has a cigarette in her mouth. (Langacker 1984, 1987)
RI : Susan has the end of a cigarette in her mouth.

RI_1はこれらの喚起する典型的なイメージと言った方がよいかもしれない。表現内容に比べるとイメージの方は具体的でずっと豊かである。逆に，この豊かなイメージのどの部分を表現するかを考えてみると，表現のポイントとなるのは認知的に「際立ち」(salience) の高い部分である。この「際立ち」という概念も内在的推論に不可欠の要素のようである。

このように見てくると，内在的推論に係わる操作や作用は，知覚や認知に関連するもののようである。対して語用論的，外在的推論の方は常識に基づいている部分が大きい。

2．2．「真理値」に関する問題

会話の含意 (QI と RI) の重要な同定基準は，含意が真理条件的ではない，つまり真理値に貢献しないということであった。しかし，このことが疑わしいことはすでにグライス語用論が提唱されたころから指摘されていたが (cf. Wilson and Sperber 1981)，Levinson (ms) の巧みなデータによって QI や RI (特に RI_1) が文 (の命題) の真理値に貢献しうることを明示的に示すことができるようになった。

まず，QI について見てみよう。例文(31a)において比較されている，二つの名詞句に含まれている数量詞，three hundred dollars と three hundred dollars and possibly more に関する TCM と含意 QI を (31b) に示す (cf. 1.2)。

(31) a．(You shouldn't continue to gramble ; I know you've already lost

three hundred dollars, but) losing three hundred dollars is better than losing three hundred dollars and possibly more.

b. "losing three hundred dollars"

TCM : losing at least three hundred dollars

QI : losing no more than three hundred dollars

"losing three hundred dollars and possibly more"

TCM : losing possibly more than (≒at least) three hundred dollars

QI : (cancelled by the phrase "and possibly more")

(31a) の意味に関して，TCM だけを考慮すると二つの名詞句の TCM はほぼ同一であるから，この文は 'x is better than x' という形式の無意味文になる。ところが，実際は「負けは三百ドルの方がそれ以上よりよい」という意味であり無意味とならないのは，主語名語句の QI「三百ドル以上ではない」が意味（真理条件的）としての役割をしているからである。

1．3 で検討した RI_1 のうち and の含意（時間的順序）を例にとってその意味的貢献度を見てみよう。まず (32a) の例文の二つの名詞句，driving home and drinking beers と drinking beers and driving home に関する TCM と RI_1 を（32b）で確認しておく。

(32) a. Driving home and drinking beers is better than drinking beers and driving home.

b. "driving home and drinking beers"

TCM : driving home & drinking beers（& は 2 つの事態が生起することだけを示す）

RI_1 : driving home and then drinking beers

"drinking beers and driving home"

TCM : drinking beers & driving home

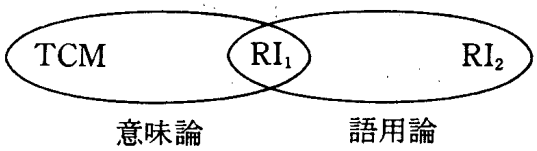
RI_1 : drinking beers and then driving home

さて，二つの名詞句の TCM はいずれも二つの事態（飲酒と車での帰宅）が生起したことだけに言及し（時間的順序には言及しないので），その内容は

等しい。従って，TCM だけを考慮すると，(32a) も 'x is better than x' 形式の無意味文となる。この文を有意味にする決定的な要因は二つの事態の時間順序であり，それは RI_1 によって与えられる。ここに RI_1 の真理値への貢献をみることができる。

以上二つの問題点を整理すると興味深いことが見えてくる。まず，RI_1 に関して，真理値に関与し，かつ内在的推論に基づくという点では TCM に近く，取り消し可能であるという点では典型的な語用論的含意 RI_2 に近い。また QI 関しても，真理値に関与しうるという点では意味論的である。つまり，RI_1 と QI は意味論と語用論の二面性をもつということである。RI_1 などは，この RI_1 に基づいて RI_2 が推論されるという点を加味すると，下の図に示されるように，RI_1 こそ意味論と語用論のいわゆるインターフェイスであるということができる。

(33)



3．0．認知意味論による解決

RI_1 が内在的推論に基づくという問題と，RI_1, QI が真理値に関与するという問題を解明し，かつ語用論に対して(33)のような関係にある意味論の枠組みは，Langacker (1987, 1991) の認知意味論に見いだすことができる。

認知意味論の最も基本的なテーゼは，従来のように意味を真理条件の束と見なさず，概念あるいはイメージ（広義の）と見なす点にある。例えば A cat chased a mouse. という文の意味は，Katz (1972) において行われたように真理条件（の翻訳である意味素性）の束で与えられるのではなく，この文を聞いた母国語話者が想起するイメージに類するものだとみなされている。われわれの直感に一致し，意味の原点である，「概念」や「イメージ」は，その様々な側面が明確にされ，言語記述のための確固たる理論的構築物として位置づけられるようになっている。

3．1．真理値に関する問題の解明

認知意味論には，自然言語の意味に関するいくつかのテーゼがあるが，真理値の問題を解くカギを与えてくれるのは次のテーゼである。

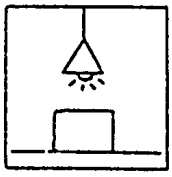
(34) 表現の意味は，意味基盤（base）上の卓立部（profile）によって決まる。

つまり，意味とは平板なイメージではなく，その一部が際立ち，いわば図（figure）と地（ground）の構図を成しているということである。それを，認知意味論では，意味基盤と卓立部から成るというわけである。従って，表現の意味が違うというとき，表現全体の情報量に差がある場合もあるが，情報量つまり意味基盤が等しく卓立部だけが違う場合もある。その後者の例を(35)に見ることができる。

(35) a．the lamp above the table
b．the table below the lamp
c．the leg of the table below the lamp
d。the light from the lamp above the table

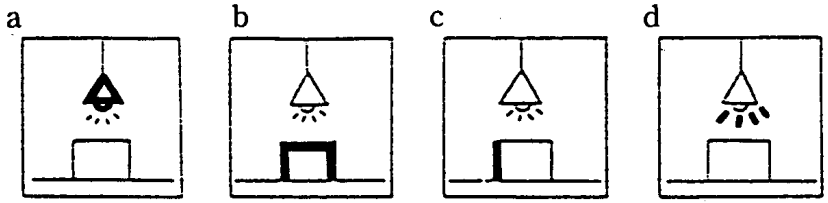
これらの例の意味基盤はすべて等しく，次の(36)の絵図で示すことができる。この絵図には卓立部がないので言語表現の意味値にはなっていない。

(36)



(35)の各表現の意味は卓立部の位置によって決まる。(35a) は絵図(36)のランプを，(35b) はテーブルを卓立させている。卓立部を太実線で表すと，(35)(a)(b)の意味はそれぞれ(37)(a)(b)のような絵図で表される。

(37)



(35)(c)(d)は leg や light の語彙がある分だけ(c)(d)より情報量が多いような印

象を与えるが，実際はそうではない。テーブルやランプには脚や明かりは付き物だから，leg や light の表現がなくても，意味量は変わらない。(c)(d)の leg や light はその部分に卓立部があることを示しているだけである。従って(35)(c)(d)の意味は(37)(c)(d)の絵図で示される。

さて，言語表現の意味における卓立部の重要性が認められたところで，次の表現を見てみよう。この例は，本名を Chad，しこ名を「曙」というハワイ出身の新大関に，母親が結婚についての忠告として述べた表現である。

(38) Chad, find a girl who will marry Chad, not Akebono.

Chad と Akebono は同一人物を指すから，真理意味論的にはこの文は矛盾文である。ところが実際そうならないのは，二つの名前が同一人物を指していながらも，それぞれ別の側面を際立たせるからである。Chad は人格的側面を，Akebono は有名力士としての側面を卓立させ，そして，その卓立部だけが比較対照されている（否定の作用域に入っている）。

ところで，Chad の卓立させる人格的側面と Akebono の卓立させる有名力士としての側面は，本来は二つの名前の単なる連想に過ぎなかったものである。それが卓立部へと昇格するのは，この種の構文に特有の機能による。この構文は，意味の似通った表現を対比させることによって，両者の微妙な意味の違いを際立たせている（つまり卓立部へ昇格させている）。同じことが知覚や認知の現象一般について言えそうである。例えば，色合いの微妙に違う二種類の赤色を別々に見るとその違いは見えにくいが，その 2 つを並べて同時に見ると違いがよく見える。結局，卓立部選択には少なくとも二種類の手段があるということである。一つは，(35)のように純粋に文法的手段に基づく場合，もう一つは，知覚の一般的傾向に依存しながら類似の表現を対比する方法である。

さて，この節の本題の RI_1 の真理値への関与の問題であるが，RI_1 が真理値に関与するということは，RI_1 が真理条件的意味（TCM）と見なされる（つまり卓立される）場合があるということに他ならない。例えば，and の含意 RI_1（時間的順序）が，TCM として卓立されるのは(38)の場合と同じメカニズムである。類似した二つの表現，"driving home and drinking beers" と

"drinking beers and driving home" が比較対照されると，それぞれに共通な本来の TCM (「車で帰宅すること」と「ビールを飲むこと」) は背景化され，両者の相異部分である含意が際立つ。この二つの名詞句は，"Driving home and drinking beers is better than drinking beers and driving home." という形式で比較対照され，それによって卓立される二つの時間的順序の一方が他方より望ましいと断定されている。QI や他の RI_1 の真理値への関与についても同様である。

このように見てくると，Levinson(ms) の「QI や RI は真理値をもちうる」という指摘は以下のように修正，再解釈する必要がある。まず，「QI や RI」ではなく，より厳密には「QI や RI_1」である。また「真理値をもちうる」とは，「卓立されうる」ということである。しかし，卓立されるとはいっても，QI や RI_1 を含意する表現が単独で用いられてその含意部分が卓立されるというのではない。類似する基本的意味をもつ二つの表現を比較対照する場合にそうなるのである。しかも，この現象は，知覚作用の一般的傾向と関連している。従って，(35)のように純粋に文法的に選択される卓立部と，(32a) のように知覚作用の一般的傾向との関連で卓立化される部分は，卓立の仕方が異なり，この点でやはり「TCM 対 QI, RI_1」は区別されるということになる。しかし，この区別は新グライス派語用論を復活させることにはならない。その理由を一言でいうと，真理意味論を前提とする語用論の枠内にとどまる限り，本来の TCM と，ある状況で含意から昇格した TCM とを区別できないからである。つまり，一見自明のことのように思える「真理値に関与する」ということの根本的解明が語用論ではできないのである。それ故，含意が真理値に貢献するように見える表層的現象に出会うと，それを TCM と等質の現象として扱わざるをえなくなる。そのような現象がなぜ生じるのかという本質的究明よりも，語用論の理論的整合性の方が問題にされて，その修正へと向かう。例えば，Levinson(ms) はこのような含意を一括して generalized implicatures とよぼうとしたし，Sperber and Wilson (1986) は explicatures とよんでいる。このような用語の提案は，ある特徴をもつ一群の現象に単なる名称が与えるだけで，その現象の根本的な説明にはならない。

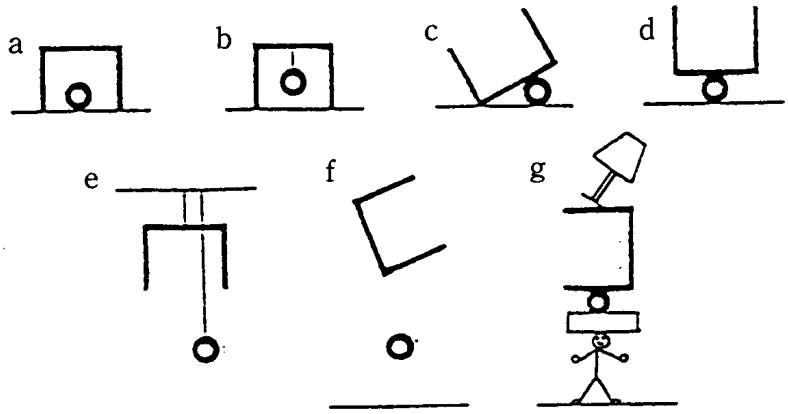
本節の結論を再度述べて，次節へ進むことにする。知覚や認知に基づく説明は一つの妥当な説明であろうと思われるが，意味＝イメージであり，そのイメージが基盤と卓立の構図を成すという認知意味論的テーゼに基づくと，従来の TCM の側面を卓立部という概念によって捉えることができる。しかも，本節でみたように QI や RI_1 の TCM への昇格は卓立化と見なすことができるが，その卓立化は，通常の文法的手段による卓立化ではなく，知覚的傾向に依存する卓立化である。このように，卓立という知覚的・認知的概念によって，含意の TCM への昇格現象を説明することができるわけであるが，次には，認知意味論的に TCM と RI_1 とがどのようなものなのか，そして両者はどのような関係にあるのか明らかにする必要がある。2．1で，RI_1 と RI_2 とが異質の含意であり，それぞれ内在的推論と外在的推論に基づくことを示したが，TCM と RI_1 について認知論的に明らかにすることにより，RI_1 と RI_2 の異質性がさらに明確になるであろう。

3．2．認知意味論における TCM と RI_1

次の(39)は，(40)のいずれの絵図の表す状況に対しても用いることができる。従って逆に，(40)の各絵図は，(39)のさまざまな解釈を表しているとも言える（Langacker 1987）。

(39) The ball is under the table.

(40)



さて，(39)の意味とは何であろうか。どのように表されるのであろうか。まず，母語話者は(40)(a)～(g)がいずれも(39)の可能な解釈であると判断できるとい

う事実がある。この判断ができるのは，母語話者に(39)のもつ中核的意味が理解されているからであると考えられる。つまり，母語話者は，(40)(a)～(g)が（細部はどうであれ）その中核的意味から逸脱しないかぎり，それらを(39)の解釈だと認めることができるのである。もし，母語話者に中核的意味の理解がなければ，個々の解釈に対してそれらが当該表現の解釈であるかどうかの判断はできないであろう。また，現実の場面に完全に同一の場面はないのだから，表現に具体的な解釈だけで中核的意味がないとすると，類似の新しい場面に対してその表現を用いることができなくなる。このような理由から，中核的意味を心理的実在としてよいであろう。(39)の中核的意味は，少なくとも(40)(a)～(g)の一般化であり，共通部分である。そのような意味を，スキーマ的意味（schematic meaning）とよぶことにする（以後 SK と表示する）。意味とはイメージであるから，例えば(39)の SK は概要的な絵図で表されるはずである。これが意味の一つである。(40)(a)～(g)はそれぞれスキーマ的意味 SK の具体的な例(instantiation)であるから，それらを例示的意味（あるいは例示的イメージ（instantiational image））とよぶことにする（以後 INST）。ごくふつうの状況で(39)の文を聞いたときに（40a）のようなイメージが浮かぶことも事実であるから，（40a）は例示的イメージ INST のなかでも，プロトタイプ的な INST であるといえる。これが意味の第二の側面である。従って，心理的実在としての意味は SK と（プロトタイプ的）INST によって表されるということができる（これは認知意味論の立場でもある）。例えば，tree の意味といえば，木についての一般的な知識 SK と，tree を耳にしたときに想起する具体的な何種類かの木，すなわち INST から成る。従って，認知意味論的な意味は個人によって状況によって微妙に（あるいは大きく）違うことがあるし，また違っていてよい。子供にとっての tree の意味は大人のそれとは違うはずである。これが認知意味論が主観主義的である所似である。

さて，表現の意味を構成する SK と INST のうち，SK は概略的であり，INST はその具体的な例であるから，INST の方が情報が多い。また，INST が実際にどのようなものになるかは，コンテクストや背景的知識に依存している。コンテクストや背景的知識に依存しているとはいえ，その二者がどの

ように作用してINSTを決めるかは意識することはできない，つまり内在的である。情報量と内在性に関する特徴は，TCMとRI_1についてすでに確認した特徴と同じであり，SK，INSTこそが，TCM，RI_1の本性なのである。このように捉えることによって，TCMやRI_1にまつわる誤解も解消する。(41) "The cat is on the mat." の意味する 'The cat is lying on the mat.' を疑いもなくTCMと見なしていたが，これは誤認で，INST（つまりRI_1）の一つと見なすべきものなのである。(41)のSKはもっと抽象的であり（42a），そのINSTは（42b）の他にも，特殊なコンテクストでの（42c）などがある。

(41) The cat is on the mat.

(42) a. SK : The cat is somehow supported by the mat.

b. $INST_1$: The cat is lying on the mat.

c. $INST_2$: The cat (drugged into stiffness) is balanced on the edge of a mat (which is itself firm, and at an algle to the ground. (cf. Searle 1979, Wilensky 1989)

（42b）をTCMと見なしたのは，（42b）がINSTのなかでも活性化されやすい（想起されやすい）プロトタイプ的なINSTだからである。(42)のいわゆる意味は（42a）のSKと（42b）のプロトタイプ的なINSTによって与えられる。こうして見ると，多くの表現について「字句通りの意味」あるいはTCMと見なされているものが実際はINSTであることが推察されよう。

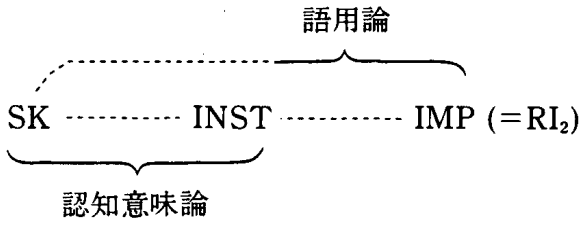
このようなINSTはSKをより具体化したものであるから，これまでRI_1と見なしてきたものと全く同じものなのである。例えば，"John pushed the cart to the checkout." という表現(11)の含意 'John pushed the cart full of groceries to the supermarket checkout in order to pay for them.' がSKの具体化であり，(39)や(41)のINSTの具体化と同質である。他のRI_1についても同様のことが言える。そして，これまでに検討したRI_1のほとんどが，プロトタイプ的なINSTであるから，それぞれの表現の意味の一部を成すということになる。例えば，"I broke a finger." の意味はSKの 'I broke a person's finger.' とINSTの 'I broke one of my fingers.' から成る。二つの出来事についての表現 "A and B" の場合も同様に，その意味はSKの 'A & B'，INST

の 'A and then B' あるいは 'A and therefore B' から成る。

4. 結語：Neo-Pragmatics の構成

これまでの議論をまとめると以下のようになる。まず，認知意味論では意味とは概念あるいはイメージである。言語表現はスキーマ的意味 SK をもち，その表現が特定のコンテクストで用いられると SK が具体化され情報量の豊富な例示的意味 INST を表す。INST はコンテクスト内の意味であり，会話の原則（R 原則）とも関連しているとはいえ，純粋な語用論的含意ではない。SK 同様極めて内在的な認知プロセスに基づいているからである。従って，SK も INST も認知意味論の対象である。SK を例示する INST は数多く存在するが，そのなかには容易に想起される活性化の度合いの高い INST があるが，それを INST のプロトタイプという。通常，表現の意味は，SK とそれを例示するプロトタイプ的 INST によって表される。さて，INST は語用論的推論の入力となり会話の含意(RI_2，以後 IMP とする)を生じる。INST から IMP への語用論的推論は，意識化されない内在的な推論ではなく，R 原則と日常論理あるいは丁寧さの原則がかかわっている。以上をもとに，自然言語の意味（の類型）と，それを対象とする理論分野は以下のように図示することができる。

(43)



SK と INST は認知意味論の対象ではあるが，INST は R 原則，コンテクストや背景的知識と関連し IMP との共通性もあるので，語用論と全く無縁ではない。それで INST は語用論の対象を表す（破線の）波括弧のなかに含められている。QI がこの図のどこの位置付けられるかは明確ではないが，INST と非常に類似した性質であることはすでにみた通りである。

複合表現の SK はいわば合成的意味であるが，構成要素のイメージとその

合成のメカニズムはLangacker認知意味論の中心課題の一つであり，彼自身による解明が相当に進んでいると言ってよい。問題は，INSTの解明で，SKからどのようなメカニズムでより具体的なINST(これもイメージである)を解釈するのか，この点に関する解明は一般に信じられているほどには確定的な解明は得られていない。この過程に属する現象として，メタファーやメトニミーの解釈も含め，さまざまな種類の現象が指摘されているが，表面上の傾向を単に定式化するのではなく，認知的にどのようなことが生じているかを解明していく必要がある。認知意味論の出力であるINSTが，語用論的推論の入力になる点ではINSTが意味論と語用論のインターファイスであり，INSTは二面性を備えている。この図に示されているような，認知意味論をベースとする全域的意味理論をNeo-Pragmaticsとよび，従来の真理条件意味論を前提とする語用論から区別する。

注

1）Horn（1984：13）の原則は次の通り。

The Q Principle (hearer-based):

Make your contribution sufficient.

Say as much as you can.

The R Principle (Speaker-based):

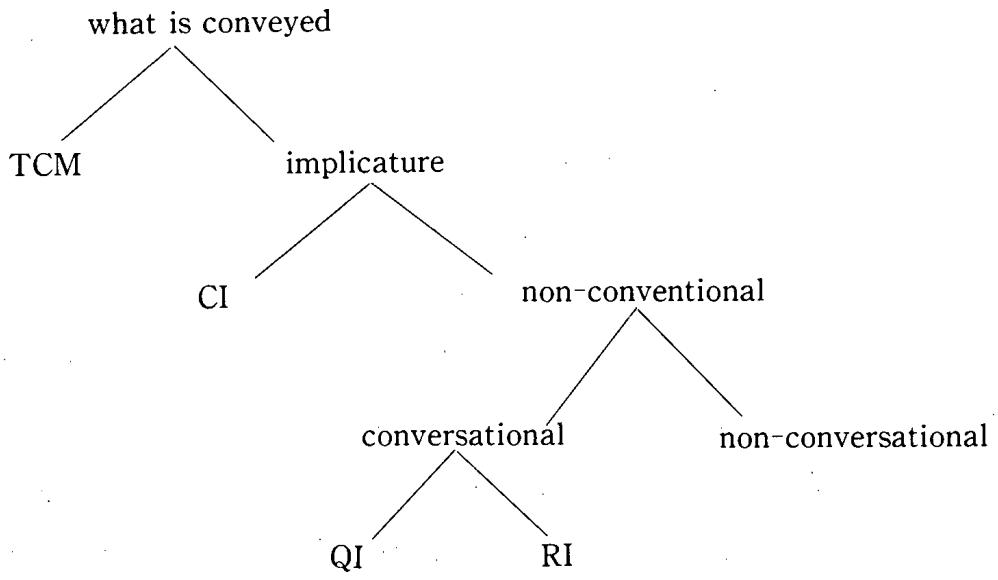
Make your contribution necessary.

Say no mort than you must.

Q PrinciplesにはGrice（1975）の会話の原則のうち，量の第一原則が対応し，R Principleは，量の第二原則，関連性の原則，方法の原則が対応する。Q，Rはそれぞれquantity, relation（またはrelevance）の頭文字。本文の(1)のR原則には，最少の情報を与える際どのような情報が省略されるかを明示した。

2）より厳密には次の図ように類型化される。このように厳密に階層化すると，non-conventionalでかつ，non-conversationalな含意の存在が認められるが，この含意は，基本的には話し手の意図しない含意で，口調や声色など

の伝える含意がその典型例である。



Appendix

Appendix 1. QI と RI の混同

QI と RI の混同が生じている例があるのでそれを指摘し議論する。Geis and Zwicky (1971) の指摘した「if 節の必要十分条件読み」(conditional perfection) は RI の典型例としてよく引き合いに出されるが (Horn 1984, Levinson 1987, Huang 1991), 実際は QI である。日常言語においては, (1a) の if 節 (十分条件) は, (b)のように if and only if の読み (つまり必要十分条件読み) になる。

(1) a. If you mow the lawn, I'll give you five dollars.

b. 'If and only if you mow the lawn, I'll give you five dollars.'
(君が芝生を刈ったとき, そしてそのときのみ君に 5 ドルあげよう)

(1b) を分かりやすく言うと「芝生を刈れば 5 ドルあげるが, 刈らなければ 5 ドルはあげない」ということである。if and only if p, q=① if p, q and ② only if p, q であるから, (1b) も① if you mow the lawn, I'll give you five dollars and ② only if p, q と表せる。①の部分は (1a) の断定するとこ

ろであるから，TCM とみなされる。問題は②が何かということである。つまり，問題なのは発話 "if p, q." と 'only if p, q." の関係である。これは，実は，発話 "John came." とその QI 'Only John came.' の関係と同じである。話し手がQ原則を守って，"John came." と発すれば，それが最大情報であるはずだから，「来たのは John 以外にいない」つまり 'Only John came.' が含意される。同様に，発話 "if p, q." は，q を成立させる条件として p があることを述べているが，話し手がQ原則を守っていると，「q を成立させる条件は p 以外にない」つまり 'only if p, q.' が含意される。これは，Q原則の下の含意であるから QI である。従って，日常言語の if 節の解釈（例えば1b）は，TCM（十分条件読み）と QI（必要条件読み）から成ると考えなければならない。

Appendix　2．　Q原則とR原則の優先順序

二つの原則の優先順序について考察しておく。「私が自分の手の指の一本を折った」ことを英語で伝える場合があるとしよう。その場合，Q原則に従えば，すべての情報を伝達しなければならないから（1a）のような発話になる。ところが，同じ情報を伝達するのにR原則に従えば，推論可能な内容は削除することができる。英語では，（1b)のように誰の指かを特定しなくても上の情報を伝達することができる。

(1)　a．I broke <u>one of my fingers.</u> (folowing Q Principle)

　　b．I broke <u>a finger.</u> (following R Principle)

ところが，「私は昨夜自分の車の一台のなかで眠った」を伝達する場合，Q原則に従って次の(2a)のように言うことはもちろんできるが，R原則に従って，誰の車かを特定しない（2b）を用いて，（2a）の情報を伝達することはできない。

(2)　a．I slept in <u>one of my cars</u> last night. (following Q Principle)

　　b．*I slept in <u>a car</u> last night(=2a). (following R Principle)

ただし，「私」が中古者のディーラーであって何台かの車を所有していることが明らかなコンテクストでは，（2b）は（2b）の情報が伝達可能である（Birner 1988)。従って，どのような情報が推論可能であり，また省略可能

であるかは，表現内容やコンテクストによって決まっているということであり，そしてそれ故，R原則の適用は表現内容やコンテクストに依存しているということである。つまり，Q原則を守るのが基本であるが，聞き手にとって推論可能な情報が含まれている場合R原則にしたがってもよいということである。

例えば，「右手にスプーンをもってコーヒーをまぜる」という内容は，R原則に則った「右手デコーヒーヲマゼル」という表現でも，英語の stir one's coffee with one's right hand という表現を用いても伝達される。これは，ひとつには，スプーンの部分が容易に推論可能だから，R原則によってその部分が省略できるためであり，また「右手デコーヒーヲマゼル」という表現に対する可能な解釈「右手で直接コーヒーをまぜる」(QI) が非日常的であり排除されるからである。ここでは，どのようなまぜ方が日常的(典型的)なコーヒーのまぜ方でどのようなまぜ方がそうではないのかという，いわゆる常識が係わっており，そのような常識がR原則適用に影響する。次の例は古典的なジョークであるが，そのような常識を逆手に取っている。(これは漫才のボケ方の一つのパターンでもある。)

(3) Speaker A : Should a person stir his coffee with his right hand or his left hand?

Speaker B : Neither. He should use a spoon. [Estar 1952 : 21] (Raskin 1985 : 26)

Appendix 3. 意味の類型化に関する Horn, Grice, Levinson の比較

Grice やそれ以後の Neo-Gricians の体系はそれぞれ原理や用語が多少異なるので，Horn (1984, 1989) とのおおよその対応関係を表にして示しておく。

Horn (1984, 1989)	TCM	CI	QI	RI
Grice (1975)	What is said	conventional implicature	generalized conversational implicature	particularized conversational implicature
Levinson (1987)	TCM	conventional implicature	Q-implicature	I-implicature

Grice の generalized conversational implicature は話し手が会話の原則（質，量，関連性，様態）にしたがっているときに生じる含意であり，particularized conversational implicature は，話し手が表面上会話の原則に違反しながらも，深いレベルではそれを守っていると判断されるときに推論される含意である。後者の場合の原則違反は，会話の原則に忠実に（正しいと思われることをすべて）話したのでは，余剰的になったり失礼になったりするので，伝達内容を少なめにし，また一見無関係な内容を口にするためである。つまり，原則的には，会話の原則を守らなくてはならないが，状況によっては他の原理・原則（例えば最小労力の原理や丁寧さの原理）を優先させ，会話の原則は（話し手の意図が聞き手に推論可能であるかぎりにおいて）違反してもよいということである。本文(14)は，Horn のQ原則に対してR原則を優先させる場合の動機（条件）を与えているが，このことは，基本的にはQ原則が優先的であることを示している。Levinson の I-implicature の生成メカニズムの原理は Horn の RI のそれと同じであると考えてよい。

References

Atlas, J. and S. Levinson. 1981. *It*-clefts, informativeness, and logical form. Cole, P., ed. Radical pragmatics. New York : Academic P. 1-61.

Birner, B. J. 1988. Possessives vs. indefinites : Pragmatic inference and determiner

choice. Papers in pragmatics 2 : 1/2. 136-146.

Carston, R. 1990. Quantity maxims and generalized implicature. UCL Working Papers in Linguistics 2. 1-31.

Charniak, E. 1972. Towards a model of children's story comprehension. MIT ms.

Chomsky, N. 1982. Lectures on government and binding. 2nd ed. Dordrecht : Foris.

Clark, H. H. and Haviland, S. E. 1977. Comprehension and the given-new contrast. Freedle, R., ed. Discourse production and comprehension. Hillsdale, N. J. : Lawrence Erlbaum. 1-40.

Fauconnier, G. 1985. Mental spaces. Cambridge, Mass. : MIT.

Geis, M. and A. M. Zwicky. 1971. On invited inferences. LI 2. 561-65.

Grice, H. P. 1967. Logic and conversation. Unpublished ms. of the William James lectures, Harvard U. (Revised in Grice 1989, Part I)

_____. 1975. Logic and conversation. Cole P. and J. L. Morgan, eds. Syntax and semantics 3. New York : Academic P. 41-58.

_____. 1989. Studies in the way of words. Cambridge, Mass. : Harvard UP.

Haiman, J. 1985. Natural syntax : Iconicity and erosion. Cambridge : Cambridge UP.

Harnish, R. M. 1976. Logical form and implicature. Bever, T., J. Katz and D. T. Langendoen, eds. An integrated theory of linguistic ability. New York : T. Y. Crowell. 313-391.

Horn, L. 1972. On the semantic properties of logical operators in English. University of California at Los Angeles dissertation. Distributed by IULC, 1976.

_____. 1978. Remarks on neg-raising. Cole, P., ed. Syntax and semantics 9. New York : Academic P. 129-220.

_____. 1984. Toward a new taxonomy for pragmatic inference : Q-based and R-based implicature. Schiffrin, D., ed. Meaning, form, and use in context. Washington D. C. : Georgetown UP. 11-42.

_____. 1985. Metalinguistic negation and pragmatic ambiguity. Lg. 61. 121-174.

_____. 1988. Pragmatic theory. Newmeyer, F., ed. Linguistics : The Cambridge survey. Vol. 1. Cambridge : Cambridge UP. 113-145.

_____. 1989. A natural history of negation. Chicago : U. of Chicago P.

Huang, Y. 1991. A neo-Grician pragmatic theory of anaphora. JL 27. 301-335.

_____. 1992. Against Chomsky's typology of empty categories. J. Prag. 17. 1-29.

Karttunen, L. and S. Peters. 1979. Conventional implicature. Oh, C.-K. and D. A. Dinneen, eds. Syntax and semantics 11. New York : Academic P. 1-56.

Katz, J. 1972. Semantic theory. New York : Harper and Row.

Kuno, S. 1985. Functional syntax. Chicago : U. of Chicago P.

Lakoff, G. 1987. Women, fire and dangerous things. Chicago : U. of Chicago P.

Langacker, R. W. 1984. Active zones. BLS. 10. 172-188.

_____. 1987. Foundations of cognitive grammar. Vol. 1. Stanford : Stanford UP.

_____. 1988. An overview of cognitive grammar. Rudzka-Ostyn, R., ed. Topics in cognitive linguistics. Amsterdam : John Benjamins. 3-48.

_____. 1991. Foundations of cognitive grammar. Vol. 2. Stanford : Stanford UP.

Leech, G. 1983. Principles of pragmatics. London : Longman.

Levinson, S. C. 1987. Minimization and conversational inference. Verschueren, J. and M. Bertucchelli-Papi, eds. The pragmatic perspective. Amsterdam : John Benjaminds. 61-129.

_____. 1987b. Pragmatics and the grammar of anaphora : a partial pragmatic reduction of binding and control phenomena. JL 23. 379-434.

_____. 1988. Generalized conversational implicature and the semantics/pragmatics interface. Cambridge ms.

_____. 1991. Pragmatic reduction of the Binding Conditions revisited. JL 27. 107-161.

Nakamura, Y. 1983. Kansetsusei gensho ni kansuru togoriron (An integrated theory of indirect phenomena). Memoirs of law and literature 5, Shimane U. 213-237.

_____. 1991. Logic of honorifics and typology. Bahner W., S. Joachim and D. Viehweger, eds. Proceedings of the 14th international congress of linguists. Akademie-Verlag, Berlin. 2406-2409.

Numberg, G. 1978. The pragmatics of reference. Bloomington, Ind. : IULC.

Raskin, V. 1985. Semantic mechanisms of humor. Dordrecht : D. Reidel.

Sacks, H. 1972. On the analyzability of stories by children. Gumperz, J. and D. Hymes, eds. Directions in sociolinguistics. New York : Holt, Rinehart and Winston. 425-435.

Schmerling, S. 1975. Asymmetric conjunction and rules of conversation. Cole, P. and J. Morgan, eds. Syntax and semantics 3. New York : Academic P. 211-31.

Searle, J. R. 1979. Expression and meaning. Cambridge : Cambridge UP.

Sperber, D. and D. Wilson. 1986. Relevance. Cambridge, Mass. : Harvard UP.

Wilensky, R. 1989. Primal content and actual content. J. Prag. 13. 163-186.

Wilson D. and D. Sperber. 1981. On Grice's theory of conversation. Werth, P., ed. Conversation and discourse. London : Croom Helm. 155-178.

Zipf, G. K. 1949. Human behavior and the principle of least effort. Cambridge : Addison-Wesley.